

三田福徧

——歯科の歴史と本会の活動——

▽CKLEUBO (三田会) DENTISTS の誕生

年度三田会、地域三田会、職域三田会、各種三田会と、三田会もきわめて多様にわかれているが、これとはひと味違った三田会が新たに誕生した。KEIO・DENTIST・CLUBがそれだ。慶應義塾に学んだ者の中で、大学学部を卒業後、或いは高校以下の諸学校を経て、歯科医師を志した人は

「三田評論」

1986年10月号より抜粋

意外に多い。ところがこれまで全体的な連繋組織は全くなかった。そのことを遺憾として、村田基生(幼21高27・村田歯科医院長)、鈴木邦夫(普30高33・日本大学松戸歯学部教授)、鈴木雄士(普27高33・日本歯科大学教授)、鶴木隆(中35高38・東京歯科大学助教授)等の諸君が中心となって、このたび歯科医師三田会を結成、去る9月6日(土)午後2時から帝国ホテル内の東京三田倶楽部を会場に、その発会のパーティが開かれた。現在までに加入している会員数は一一〇名。

趣意書にもあるように、日本の歯科医学は福沢門下の小幡英之助、高山紀斎、血脇守之助らの三田の先学によって創始されたものだけに、このKEIO・DENTIST・CLUBによせる周囲の期待は大きい。

会則によれば、「慶應義塾に学んだ者のうち歯科大学を卒業した者」を「会員とする」とあり、該当者は東京都世田谷区等々力3-29-7鈴木邦夫(電話〇三-七〇五-〇九〇八)へぜひご連絡願いたいとのことである。

し洋方齒科醫學の全貌はこの小幡氏によつて先づ日本に傳へ残されたのである。

小幡英之助氏は、慶應義塾の熟頭たりし小幡篤次郎氏の義兄孫兵衛氏の長男で、嘉永三年八月十日生れだから、明治二年中上川彦次郎氏と共に上京入塾したのは二十歳の時である。此時は義塾は新館座にあつて、同窓として分明してゐるのは中上川彦次郎、門野幾之進、坪井仙次郎、箕浦勝人、奥平每次郎、四屋純三郎、甲斐織衛、後藤收太、小幡英之助、中村英吉、須田辰次郎、猪飼麻次郎の諸氏で、後年、天下を双肩に背負つた中心人物のみである、これ等の人物の間に伍した小幡英之助氏は、明治三年斷髮令が出るや塾内で最も早く斷髮を行つた程の青年だつたが、初め醫師になる考で當時新館座に開業してゐた中津出身の醫師佐野諒元氏の門に入り、技就り間もなく代診生となつたが、四年秋、篤次郎氏に命ぜられて横濱十全病院長近藤良黨氏の私塾養育舎に入り外科學を攻究した。然るに今度は小幡の技工的才能を認められ、近藤良黨氏并に其兄坦平氏に進められて遂に齒科醫學に傾ずることを決心し、又近藤氏の熱心なる交渉の結果漸くエリオットに師事するを得た。エリオットは小幡氏の才能を愛し三ヶ年間懇切に洋方齒科醫學を教へた。明治七年末エリオットが本邦を去り上海に赴く時は、小幡氏も上海まで隨從し、半年の後、更にエリオットが英國に向つた爲めに上海で別れて歸朝した。彼は醫師として開業の資格を有するに拘らず、八年夏東京醫科大學校に出願して試験

を請ひ、卒先受檢して本邦齒科試験の道を開いたのである。京橋に業を開き旁ら門戸を開放して門弟を教育し、本邦齒科醫學の發達に貢献した所が大である。

當時の醫家間には、習養を守り秘事秘傳と稱し門下と雖も容易に其蘊奥を聞くことを許さないのが例であるに拘らず、小幡氏は初めより公開して些末も隠すことなく教授した。これ福澤先生の教訓を實踐躬行したといへる。

小幡英之助氏と時を同じくして慶應義塾に入り、後齒科醫となつて大いに名を成したものに高山紀實、堀内清顯、血脇守之助の諸氏がある。高山紀實氏は本邦齒科醫學の嚆矢たる高山齒科醫學院の創立者で、後血脇守之助氏之を繼承して東京齒科醫學專門學校の前身東京齒科醫學院を建てた。共に本邦齒科教育機關の創始者である。高山紀實氏は嘉永三年十二月十二日岡山に生れ、槍術を以て藩に仕へたが、明治二年四月、もと慶應義塾々頭たりし岡田攝藏氏が、岡山に滞在し、二ヶ月間、藩の子弟十人を撰抜して英語を教授した事がある。高山氏も其の選に入つて英語を修めたが、岡田氏の歸京の前夜訪れて同行を懇望して動かないので、岡田氏も同情し藩の參事と接渉した結果、内規を破つて高山の同行を許した。高山氏が東上後は直ちに慶應義塾に入つたのである。前記小幡氏と相前後して入塾し期せずして齒科醫學を修めるに至つたのは誠に奇縁といひたい。高山氏入塾後大いに英語に



池田成彬・中條精一・伊東忠太・氏助之守・千坂智次郎 (列前より右)

氏助之守・血脇守之助・千坂智次郎 (列後)

長じたが、塾を去つた後は米人ガロツルに師事し、更に明治五年一月には渡米し、齒科醫學の有望なるを知つて齒科醫學の學習に轉じた。明治十一年四月歸國、東京銀座に業を開いた。明治二十三年一月芝伊豆子に高山齒科醫學院を創立して、續いで三十三年三月、血脇守之助氏に之を譲り、校名を東京齒科醫學院と改めた。

血脇守之助氏が慶應義塾別科に入つたのは明治二十一年正月である。當時十九才の青年で同窓には手塚猛昌、高橋光威、高山長幸、宮森麻太郎の諸氏を始め二十四名だつた。血脇氏が入塾したのは、本邦の進文學會時代からの親友たりし池田成彬の後を追つたもので、池田氏は血脇氏より三歳の長だが、義塾に入つたのは血脇氏より一年前の明治二十年で二十一年の卒業である。前記掲載の寫眞は慶應義塾とは無關係だが、池田成彬氏によつて發起された、慶應入塾前の明治十八年本郷

區元町進文學會に學だ米澤藩の池田、千坂、伊東、中條の四氏并に客員として血脇氏の五人會で、之を重遠會と稱した。血脇氏が日清戦争の後、福澤先生の意見に従ひ、支那に渡り各地に於て仁術を施したる事實は、血脇氏を知るもの、大きな話題たるのみならず、如何に福澤先生の感化が大きいかを計り得るのである。血脇氏は東京齒科醫學院を興し、續いて本邦最古の東京齒科醫學專門學校を建設したのみならず、日本齒科醫師會を興して、世界的な日本の齒科醫學制度を建設した。實に本邦の中興齒科學は血脇氏によつて整備されたといつて過言でない。

斯様に日本の齒科醫學開拓者の中心人物が悉く慶應義塾の出身者である事、奇縁といへば奇縁でもあらうが、私は、澤先生の文化教育に對する抱負の一端を、入塾中先生の感化によつて上記先覺諸氏が見事に遂行したのだと信じてゐる。

慶應義塾と齒科醫學

今田見信

慶應義塾と齒科醫學との交渉は新錢座時代から始る。更に「齒科」といふものを「醫學」の一つの中に含まれて見る場合には、福澤先生が大坂の緒方洪庵の門に入られてから始つてよいわけである。然し私は誤された題が狭義のものであるから、茲には洋方齒科醫學の輸入時代に於て直接に福澤先生の影響を蒙つた點二三についてだけ書いて置きたいと思ふ。

徳川の末期に蘭學が隆盛になり、明治時代に入つて英學が蘭學の地位を占めて旺盛となつて、日本に急速に西洋文化が紹介されて今日の文化の大本を決定した最も偉大な貢獻者は福澤諭吉先生である事は今更ら私がいふまでもない。

醫學は比較的早期に範を獨逸にとつたが、齒科醫學だけは終始一貫其範を英米にとつたので、英語の交渉は長く續いたが、極く近年に入つて吾國の齒科醫學は歐米に認識せらるゝに至り、今や技術的方面に於ても、理論的方面に於ても外國に範を求める必要が無い。萬延元年に英人にして米國に歸化したウィリ

アム・クラーク・イーストレイキが日本に來て本邦に初めて洋方齒科醫學を紹介してまだ今年は七十五年にしかならないが、この七十五年間に世界の驚異する近世齒科醫學を建設するに至つた發達の経路を顧ると、洋方齒科醫學輸入の役をつとめた中心人物が、慶應義塾に學び福澤先生の教訓を受けたことにスタートしてゐるのである。

本邦に初めて洋方齒科醫學を紹介した前記イーストレイキは、米國の輿論であつた日米通商條約締結の直後、學び得た動物學と齒科醫術とを實地に應用すべく、愛妻ア・ヴァーナ・ローズ井に僅か三歳の愛兒フランク(後の博言博士)を伴ひ、まつしぐらに横濱へ來た。日本の風景に少からず魅力を感じ、日本を根據として業を開き、時々支那にも行つて、貝類や昆虫の採集に慰められたが、齒科醫術を施したのである。このイーストレイキが來るまで日本に齒科醫學が全く無かつたといふのではない、不完全ながら約千年前から傳る口中醫に依つて口中療法は事足りたであらうし、口中醫の中でも新しい思想を抱く醫師

は蘭學によつて洋方口中療法の片鱗を知り之を秘傳としてゐた事は明である。然し乍らイーストレイキが横濱に來て業を営んだ時には、未だ頗高に充填することや義齒を作る事は誰も知らなかつたのだから、神技に等しく見へた事であらう。イーストレイキが得意にしてゐた金充填も多數の患者(患者は外國人が多かつたが)に施されたに相違ない。このイーストレイキが福澤先生の知遇を受け交際

があつたことは、同家に傳へられるいろ／＼な事項によつて窺ひ知られるが、殊に親交を深めたのは明治十四年再來後であつて、東京龜町區一番町にイーストレイキが居を構へた時も福澤先生の保證があつたからである。イーストレイキ渡來以後、レスノー・ウィン、エリオット、ボッケンス、アレキサンデル、キューリック等、相次いで來航し、洋方齒科醫學の普及に貢獻したのであるが、其中で



前右列(リ) 甲斐織衛・後藤藤太・小橋英助・中村英吉・須田辰次郎・猪飼盛次郎
後右列(リ) 門野幾之進・坪井仙郎・箕浦人・奥平每次郎・四屋純三郎
東京淺草吾妻橋實際寫眞師寫と記す

イーストレイキとエリオットは最も義塾關係の話題に富んでゐるといつてよからう。イーストレイキについては其孫バスカ・イーストレイキ氏によつて十一月號の本誌に既に紹介せられてゐるので、茲には記述を避けて置かう。セント・ジョージ・エリオットが日本へ來たのは、イーストレイキが日本を去つた翌年の明治三年で僅か五年しか横濱にゐないのであるが、其間本邦齒科醫學の事實上の開祖とも云ひ得る小橋英之助氏の入門を許

会の結成については、「三田評論」十月号の山上広場欄で紹介されたが、その発会式が九月六日午後二時から東京三田倶楽部で挙行された。当日は本塾から佐藤芳雄常任理事、金田進渉外室長、石川嘉一塾員課長、慶應病院から歯科口腔外科野本種邦教授、福田三丈塾応援指導部OB会副会長ら来賓をお迎えし、応援指導部部長と三人のチアガールの皆様の出演、会員九十五名の出席を得て盛大かつなごやかに終わった。

副会長鶴木隆君（中↓塾高↓東歯大↓札幌大↓東歯大院卒、東京歯科大学口腔科学助教授）の司会で副会長、鈴木邦夫君（普↓塾高↓日大歯↓日大医↓日大医院卒、日本歯学部頭頸部外科教授）が力強く開会を宣言した後、会長村田基生君（幼↓普↓塾高↓東歯大卒、横浜市で開業）の発会までの経緯と意図の報告、来賓の祝辞、応援指導部塾生のリードで塾歌を斉唱、本会顧問の山村武夫君（東歯大卒↓慶大医卒↓東京歯科大学病理学教授）の乾杯の音頭で懇親会に移り、再び応援指導部の演奏、チアガール共々で「若き血」、肩を組んで「丘の上」を合唱し、副会長鈴木雄士君（普↓塾高↓日歯大、日本歯科大学生理学教授）による閉会の辞の後、全員の集合写真を撮影して散会した。

本会会員の構成は学生が多く、各歯科大学に在籍する塾出身の学生は六十名に及んでいる。これは毎年、塾生の十名程度が歯科医学

を志していることになる。よって本会は今後更に会員数が増加するものと思われる。我々の希望は、歯科医学に関心を持たれる塾生が一人でも多く歯科大学の門をくぐられることである。それは歯科医学の今後の発展に大きく寄与するものと我々は確信している。

当日の出席者は次の通り。

愛知克郎、赤松正、東美知子、荒巻均、五百住守彦、石井伸明、石井秀志、石河信



KEIO DENTIST CLUB

高、石川真理、石田哲也、市川哲也、伊藤実、伊藤香、宇津見輝雄、宇野沢秀樹、大須賀豊、大曾根尚史、大谷俊一、小川浩、小田博雄、金子春樹、川崎勝久、菅家美樹、北滋、木下三博、君野岳、久保田康英、小泉昌平、小宮尚志、河野陽一、小枝義典、小枝弘実、小熊総、小林裕美、沢潤、佐々川毅、三条正統、佐野弘昭、佐藤一人、地挽雅人、篠原泰弘、鈴木邦夫、鈴木慶太、鈴木雄士、須山龍一、瀬沼滋、染矢達廣、染矢哲郎、高橋賢、高橋蓉子、田代友子、田代茂樹、田島秀治、田村睦、近田正道、鶴木隆、手島義郎、常盤肇、豊場佳雄、内藤晴人、中川種昭、中崙裕、中郷隆子、二階堂五月、二階堂雅彦、野平倍章、羽賀俊明、橋本健、長谷川寛、畑田憲一、花井淳一郎、花井晴代、林賢一、福岡雄人、古澤成博、細田透、本城真樹、前田昌彦、松本進一、御任義彦、皆川雅彦、宮川昌久、宮坂宗行、村田基生、妻鹿純一、山満、山本仁、山村武夫、山口敬、吉田公明、吉浜敬、吉川治良、服部夏雄。



KEIO DENTIST CLUB

「三田評論」

1987年5月号より抜粋

KEIO DENTIST CLUB 二

月二十一日午後二時から北里講堂にて開催。

講師に入交昭一郎君（昭33医・川崎市立病院副院長、内科医長）をお迎えして「内科と歯科診療」と題して有益な講演をいただいた。引き続いて懇親パーティに移る。本会長老杉田遜君の発声で一同乾盃、なごやかに懇談のひとつきを過ごし、宇津見暉雄君の閉会の言葉で散会した。講堂をお借りするにあたり植村恭夫医学部長、病理学細田泰弘教授、歯科口腔外科学野本種邦教授、歯科口腔外科の教室員の皆様に大変お世話になりました。誌上をかりて御礼申し上げます。

本年、歯科大学に入学する予定者は東京歯科大学に荒川忠博君（中↓日吉↓法）、杉田拓也君（中↓日吉）、鈴木聖君（幼↓普↓日吉）が明らかとなっている。このうち荒川、杉田両君は村田基生会長の呼び掛けに応じ、早くも入会し会合に出席された。

当日の出席者は次の通り。

入交昭一郎、永井哲夫、杉田遜、宇津見暉雄、村田基生、鈴木雄士、鶴木隆、林賢一、北滋、瀬沼滋、近田正道、橋本健、長谷川寛、原節宏、松橋俊雄、妻鹿純一、東美知子、五百住守彦、石河信高、宇野沢秀樹、小枝弘実、小枝義典、小林裕美、田中一雪、吉浜敬、小田博雄、中島裕、本城真樹、金子春樹、岡仁、福山進平、佐藤一人、荒川忠博、杉田拓也。

（石河信高記）

編 集 後 記

KEIO DENTIST CLUB も設立以来、皆様のご協力によりまして早くも満1周年を迎えることが出来ました。この1年に多くの新入会員を迎える事が出来、更に賛助会員を新設し、13名のご賛同を頂き、幅広く歯科医療全域に弊会の輪を広げるように努力して参りました。更に、第一回学術講演会、今回の会報の創刊、それに伴う新名簿の作製など微力ながら活動も充実してまいりました。

今回、創刊されました歯科三田会会報『K.D.C.』は、弊会の活動および会員各位の連絡の一助となれば幸であります。今回は、創刊にあたり『慶應義塾と歯科医学』を取りあげました。次回からは会員の皆様の投稿、新規行事の予定など、より充実したものにしておく所存であります。是非とも会員各位のご協力、ご指導、ご鞭撻をお願い致します。

最後になりましたが、本会報の創刊にあたり、ご協力頂いた方々に心から感謝致します。特に、格別なご配慮を頂いた明文社、中津川浩三氏には、厚く御礼申し上げます。また、多くの不手際を心よりお詫び申し上げます。

昭和62年 8 月21日

長谷川 寛

KEIO DENTIST CLUB

昭和62年 9 月

発 行 者 村 田 基 生

事 務 局 鈴 木 邦 夫

〒271 松戸市栄町西2-870-1

日本大学松戸歯学部頭頸部外科

(0473-68-6111 内線 292)